序

生物学にホメオスタシス (homeostasis) という概念がある．生物体が形態や生理の状態を安定な範囲内に保ち個体としての存続を維持する性質を言う．傷口が癒えたり身体内部の体温・化学的成分などが恒常を保つように調節されているのは，こうした性質によるものとされる．ただし，このホメオスタシスは個体にとって無限に機能するわけではなく，致命的な傷をうけることもあれば老化現象も確実に現われる．しかし，より広く生物システムを対象とすると，そこにはまた集団の存続を維持するための，次元を異にしたホメオスタシスが機能しており，遺伝子の働きもその一環と考えられている．

このような生物システムのホメオスタシスが一般的原理とすれば人間の生物学的諸機能は当然としても，文化的諸活動も大きくはこうした概念によって包括されるように思う．たとえば日常生活で規律や節制を問題にしたり，儀礼や形式が重んぜられるのも個体や集団生活の恒常性を維持するためと考えることができる．宗教は個人生活における安心立命の倫理を維持するためにあり，法律は社会という集団生活の秩序を維持するためにあると言ってよい．こうした見方をすれば人間のあらゆる行為は，さまざまな次元での恒常性の維持と考えられ，時に矛盾に満ち，相互理解に不一致があっても究極的には生物システムとしての秩序を模索しているものと言えないだろうか．

研究という行為は恐らく人間固有の文化活動であろうが，やはりホメオスタシスによって特徴づけられるように思う．もともと研究とは人間の好奇心を満たすために不思議な現象を説明しようとする行為である．それを拠り所に安心できる秩序を確かめようとしているのである．したがって研究は秩序を求めながら実は現状の秩序に疑問をもち，それを否定することによって成り立っている．より安定した秩序を追い続けることで人間は恒常性を保ち文明を発達させて来たのであろう．こうして研究は秩序の恒常性そのものを求める恒常的行為であり，研究活動はまさに人間におけるホメオスタシスの典型的文化活動と言えるであろう．

1985年10月

清水建設株式会社技術研究所長

工学博士　太　田　利　彦